

# 浦沢直樹『20世紀少年』論

—— 女たちの戦い

田中晴菜

## 序

『20世紀少年』<sup>1</sup>という作品が読まれる際に注目されるのは、やはり「＼ともだち」の正体だろう。二〇〇八年から二〇〇九年にかけて実写映画化された際も、「－ともだち」の正体は誰かという謎に焦点が当てられていた。

そして、「－ともだち」の正体をめぐる戦いの中で、登場人物たちが抱えるアイデンティティの問題が描かれていることについては、「浦沢直樹『20世紀少年』論——顔のない少年たち」<sup>2</sup>で論じた通りである。また、その戦いは、ケンヂや「－ともだち」の少年時代、秘密基地で起きた出来事が原因となっている。つまり、秘密基地という少年たち（男性たち）のコミュニティ内の出来事や人物の関係性（ホモソーシャルの関係性）が、物語の中核となっていると言えるだろう。しかし、そのような「男たちの戦い」が繰り広げられる中で、その戦いへと切り込んでいく女たちの存在も注目されるべき点である。

本論では、「女たちの戦い」と題して、女性登場人物たちについて論じていく。ここでは、ケンヂの姉であるキリコ、キリコと「－ともだち」（フクベエ）の娘であるカンナ、そしてカンナの母親代わ

りとなるユキジ、これら三人の女性たちに焦点を当てる。そして、女性たちに託された役割、特に、男性たちの関係性（ホモソーシャル）の中で、女性たちがどのような存在として描かれているのかを明確にしていく。また、キリコとカンナ、ユキジとカンナ、二つの母娘関係についても考察する。

また、『20世紀少年』という作品を論じるにあたり、物語構造については先の論文<sup>1</sup>で分析した通りであり、物語中の時間の流れは、大きく四つに分けることができる。一つ目は、一九六八年から一九七三年までのケンヂの少年時代、二つ目は、一連の事件が発生し始めた一九九七年から二〇〇〇年の「血の大みそか」までの二十世紀末時代、三つ目は、二〇〇一年から二〇一四年に第一の「－ともだち」であるフクベエが暗殺されるまでの第一の「－ともだち」台頭時代、そして四つ目は、フクベエ暗殺後、カツマタが第二の「－ともだち」となった二〇一五年から「ともだち歴3年」（二〇一七年）までの第二の「－ともだち」台頭時代である。以降、この物語構造を踏まえ、女性登場人物たちについて論じていく。

## 一 女たちに託されたもの

キリコ、ユキジ、カンナといった女性たちは、物語の中で「『せいば』」、「最後の希望」、「運命の子」といったように、特別なもの、神聖なもののように呼ばれている。ここでは、彼女たちに託された特別性、神聖性について考察していきたい。

まず、キリコについてだが、その名前について注目したい。キリコは細菌の研究を行っている際に、「Dr.キリコ」と呼ばれている。この呼び名は、手塚治虫『ブラック・ジャック』の登場人物である「ドクター・キリコ」を想起させる。「ドクター・キリコ」とは、手の施しようのない患者への安楽死を請け負う医者であり、「死に神の化身」と呼ばれている。また、『ブラック・ジャック』での「ドクター・キリコ」の初登場は、「恐怖菌」という話である。「恐怖菌」は、米軍の細菌兵器が輸送船内で蔓延し、「ブラック・ジャック」と「ドクター・キリコ」がその治療にあたるというストーリーである。「ドクター・キリコ」が「死に神の化身」と呼ばれていること、初登場が「恐怖菌」という細菌兵器を題材にしている話であることを踏まえると、『20世紀少年』のキリコには、その名前によって「死」や「恐怖」のイメージが付与されていくのである。

また、『20世紀少年』作中、二〇〇二年に、キリコは細菌の研究をしていた鳴浜町の病院を訪れ、「わたしはゴジラ わたしは15万人を踏みつぶした」というメモを残している。さらに、その時に行われていた映画祭で撮られた映像で、キリコは次のように言っている。

キリコ「私は……みなさんに顔向けできません……私はとん

でもないことをしました……弟にも……そして娘にも……」(中略)

キリコ「私はゴジラのような悪魔になってしまった。」(中略)  
キリコ「私のこれからやろうとしている行動は、せめてもの償いです。今からDr.ヤマネに協力をお願いしに行きます。」

(『20世紀少年』第11巻第10話 傍線論者)  
このように、キリコは細菌兵器の開発に携わったことで、自らを「ゴジラ」と称している。「ゴジラ」とは、一九五四年に第一作目が公開されて以降シリーズ化された、東宝映画製作の特撮映画、およびその映画に登場する怪獣のことである。「ゴジラ」シリーズのプロデューサーである田中友幸は「テーマは『水爆に対する恐怖』とした。人類がつくりだした水爆に人類が復讐される——」と語っている<sup>6)</sup>。つまり、「ゴジラ」は「恐怖」の象徴なのである。

また、『20世紀少年』では、少年時代にキリコはケンヂと一緒に映画『ゴジラの息子』を観に行っている。「ゴジラの息子」は、『ゴジラ』シリーズ第八作目であり、一九六七年に公開された。南太平洋の孤島で、巨大な卵からミニラ(ゴジラの息子)が誕生する。そして、それを察知した親ゴジラが島に上陸し、ミニラを狙う怪獣たちと戦うというストーリーである。この『ゴジラの息子』について、ケンヂとキリコは次のような会話をしている。

ケンヂ「だけどさ、ゴジラがメスだったっていうのは、ショックだよな。」

キリコ「そう?」

ケンヂ「そうだよ! やっぱゴジラは、オスでなきゃあ。子供産んだんだから、メスってことだろ。しかも、その産

まれた子供が柳家金語楼そっくりなのもシヨックだよな。」

キリコ「そうよね。相手がいないのは変よね。」

ケンヂ「相手……？ 相手って何さ。」

キリコ「お父さんゴジラ。」

ケンヂ「父さんゴジラ？ ゴジラは1匹だけだろ。」

キリコ「1匹だけじゃ、子供産まれないじゃない。」

〔『20世紀少年』第2巻第10話 傍線論者〕

キリコはここで、ゴジラ（母親）に子供がいるのならば、父親がいるはずだと指摘している。この場面では、キリコの娘であるカンナにも父親がいるはずであり、その父親は誰かという謎を提示しているのである。ここでは、キリコは親ゴジラ（母親）と重ねることができると。つまり、「ゴジラ」は「恐怖」の象徴であると共に、キリコが「母親」であることを示しているのである。

この「母親」についてだが、キリコは作中、他の登場人物たちから「カンナの母親」だと説明されることが多いが、ケンヂの姉であり、ケンヂの母親代りとしても描かれている。

作中の過去の回想で、ケンヂの母親がケンヂを妊娠している時、経済的な理由からケンヂを産むことを諦めようとする場面がある。その時、キリコは「あたいがお母ちゃんになる!!」と言っている。

ケンヂの母親「こ……このお腹の子、どうすんのさ!!」

ケンヂの父親「いや……」

ケンヂの母親「いや……って、金もないのに子供二人も

どうやって育てんのさ!!」（中略）

ケンヂの父親「し……しかたないだろ、今回は……」

ケンヂの母親「は……あたしも、また必死に働かなきゃならないしね……しかた……ないやね……」

キリコ「あたいがお母ちゃんになる!!」

〔『20世紀少年』第2巻第8話 傍線論者〕

つまり、キリコはカンナの母親である以前に、ケンヂの代理母なのである。そして、キリコは、父親が亡くなった時に「店のことなら、お母ちゃんにまかせときな」と言って実家の酒屋を継いだり、経済的な理由から合格していた私立大学進学を諦めたり、酒屋を切り盛りするために恋人からのプロポーズを断ったりと、自分のことよりも、家族、特にケンヂのことを優先して行動している。

また、カンナと離れ、細菌兵器のワクチンを開発していたことに対して、キリコはケロヨンとマルオに次のように語っている。

ケロヨン「あんた、なんで一人でそこまでやらなきゃいけないんだ……」

マルオ「今頃カンナは、あなたがここにいることを知らされていないはずだ。やっと母子が、お互いの居場所をわかったっていうのに……」

キリコ「あの子の母親として、やるべきことをしているだけ。あの子もわかってくれるはず……」

〔『20世紀少年』第20巻第6話 傍線論者〕

これは、キリコが作ったワクチンが効くかどうか、自分の体で実験する場面の会話である。キリコにとって、カンナに対して「母親として、やるべきこと」は、細菌兵器のワクチンを作ることであり、それは細菌兵器の開発に協力してしまったことへの償いなのである。

これらのことから、キリコは自分のことよりも、娘のカンナや、母親代わりとなつてゐるケンヂのことを優先するという、理想の「母親」として描かれてゐることがわかる。

ここで、キリコのもうひとつの呼び名である「せいぼ」（聖母）について触れておきたい。「ともだち」（フクベエ）が作った「しんよげんの書」には、「せいぼがこうりんするとき てんごくかじごくのどちらかをたずさえてくるだろう」と書かれてゐる。「せいぼ」は、カンナの母親であるキリコのことを示してゐる。また、高須は「ともだち」の子供を妊娠した際、「私は「せいぼ」になるよ」と言つてゐる。つまり、「ともだち」の子供を妊娠した女性のことを「せいぼ」と呼んでゐるのである。また、この高須の妊娠は、高須が保管してゐた「ともだち」の精子を使った人工授精によるものであり、カンナに代わる「ともだち」の子供を授かるため、そして高須自身が「せいぼ」に代わるために行ったものである。つまり、この高須の妊娠は、操作された妊娠であるといえる。この物語中では、「せいぼ」という言葉によつて「ともだち」の子供を妊娠した女性を示しながら、そこにキリコのような自然受胎と、高須のような人工的受胎、二つの受胎が描き込まれてゐるのである。

また、「しんよげんの書」には、「せいぼ」が「こうりんする」とある。フクベエからカツマタに「ともだち」が入れ替つた後、「しんよげんの書」の進み具合について、「ともだち」は幹部と次のような会話をしている。

「ともだち」「しんよげんの書」はどれぐらい進んだかな？

「せーるすまん」は現れたし……「せいぼ」は「こ

うりん」した？」

幹部

「あ……あの……ミシガン湖の製薬工場は破壊しました。」

「ともだち」

「彼女の頼みの綱は途切れたということだね。」

幹部

「あ……はあ……」

「ともだち」「時間の問題だね。「せいぼ」が「こうりん」するのは……」

（『20世紀少年』第15巻第12話 傍線論者）

キリコはこの時、ワクチンを大量生産するためにミシガン湖の製薬工場で行つてゐた。このミシガン湖の製薬工場が襲撃された際、「ともだち」勢力の者はキリコのように言つてゐる。

「ともだち」勢力「「せいぼ」に「こうりん」していただきます。」

「ともだち」勢力「あなたがいなければ二〇一五年、人類は滅びます……」

「ともだち」勢力「さあ、我々にワクチンを……」

（『20世紀少年』第20巻第5話 傍線論者）

これらの場面から、「せいぼ」が「こうりんする」とは、キリコが細菌兵器のワクチンを完成させ、そのワクチンを「ともだち」勢力が手に入れるということを示してゐることがわかる。「せいぼ」とは、「ともだち」の子供を妊娠した女性のことを示すと共に、細菌兵器のワクチンを作ることが出来る女性のことを示してゐるのである。そして、そのワクチンを作ることが出来る女性は、キリコだけである。

このようにキリコは、その「キリコ」という名前や呼称から、様々なイメージや役割を付与されている。キリコは、「Dr.キリコ」や「ゴ

ジラ」という呼称では「死」や「恐怖」をイメージさせながらも、「母親」や「せいぼ」といった、命を育む、命を救う（ワクチンで命を救う）存在として描かれていくという、二重性を持っているのである。

次にユキジについてだが、ユキジは「血の大みそか」の時に、オッチョから「カンナを守れ」と言われる。

オッチョ「ユキジは帰れ。」

ユキジ「え……………」

オッチョ「おまえはカンナを守れ。」

ユキジ「でも……………」

オッチョ「俺達に何かあっても、次の時代へつなげ。おまえと

カンナは、最後の希望だ。」

ユキジ「何が最後の希望よ!! あたし達は負けない。負ける

気がしない。さあ、行くわよ!!」

〔20世紀少年〕第7巻第7話 傍線論者

この時ユキジは、カンナと共に「最後の希望」だとされている。この場面では、ユキジはオッチョたちと共に「友民党」本部へ潜入することになるのだが、この後、巨大ロボットと戦う際には、戦線から外れることになる。そして、ユキジは第一の「ともだち」台頭時代ではカンナの身元引き受け人となり、カンナの母親代わり、つまり代理母となっている。ユキジは、二十世紀末時代の戦いを見届け、第一の「ともだち」台頭時代へと、「希望」をつなぐ、世代交代の要となる女性なのである。そして、まるで聖書においてイエスの死を女性たちが見届けたように、この物語において、「見届ける」、次の時代（世代）へ繋ぐという役割は、ユキジを始めとす

る女性たちに託されていくのである。

そして、ユキジと共に「最後の希望」とされたカンナについてだが、カンナは「最後の希望」以外にも「運命の子」、「氷の女王」、「救世主」などと呼ばれている。「運命の子」は、二十世紀末時代、カンナが「ともだち」勢力に誘拐されそうになった際に、「ともだち」勢力の者たちが呼んでいたものである。これは「ともだち」(フクベエ)の子供であることを示している。また、キリコが、フクベエは自分の娘であるカンナだけは殺さない、と言っていることから、カンナは「ともだち」に対抗できる存在であることを示している。「氷の女王」は、第二の「ともだち」台頭時代で、カンナがレジスタンスを率いて、人々に武装蜂起を呼びかけていた際の呼び名である。そして、「救世主」とは、フクベエが作った「しんよげんの書」の中に登場する呼び名である。そしてこの呼び名は、聖書における「救世主」、「メシア」を想起させる。「新約聖書」では、「メシア」は「神の子」「イスラエルの王」などと記され、イエス・キリストは「多くの人のあがないとして自分の命を与え」た苦難のメシアである」とされている。つまり、この「救世主」という呼び名でもって、カンナをイエス・キリストになぞらえているのである。そして、それは同時に、カンナの父親である「ともだち」を「神」になぞらえているということになる。

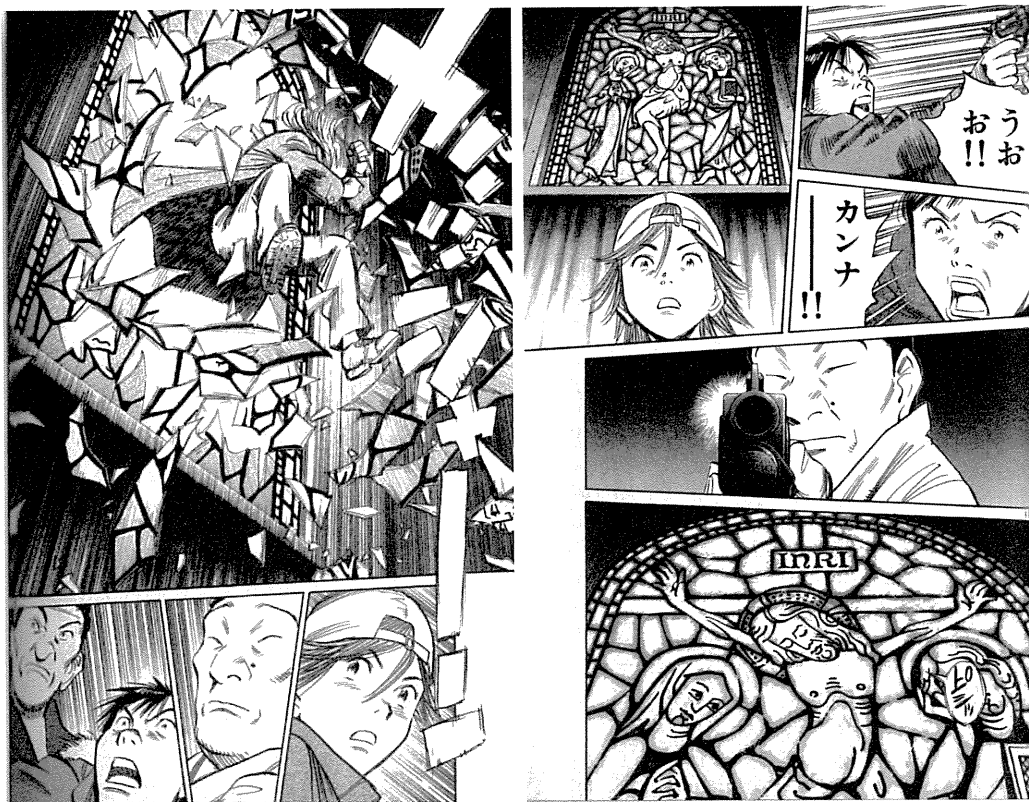
また、作中の「しんよげんの書」には、「二〇一四ねん、しんじゅくのきょうかいでしゅうかいがひらかれ しゅうかいで、きゅうせいしゅは、せいぎのためたちあがるが あんさつされてしまうだろう」とある。そして、二〇一四年、カンナはローマ法王暗殺を阻止するため、新宿の教会でマフィアたちに協力を呼びかける集会を開

く。カンナは「救世主」として暗殺されそうになるが、オッチョによつて助けられる。この時、オッチョはイエス・キリストの描かれたステンドグラスを破って登場し、(図一)カンナのことを再び「最後の希望」だと言っている。(図二)

この場面からは、二つの意味を見出すことができる。一つは、イエス・キリストの否定であり、もう一つは、イエス・キリストに代わる存在としてのカンナの登場である。そしてそれは、「ともだち」が「神」であることへの否定でもある。このように、カンナを「救世主」になぞらえながらも、それを破壊することで、「ともだち」に対抗していくための存在(象徴)であることを示しているのである。

ここで、カンナの持つ超能力について触れておきたい。カンナには幼い頃から、片方の手にお菓子を入れ、カンナに選ばせると必ずお菓子の入っている方の手を当てるなど、不思議な能力があった。(図三)そして、その能力が周りの人々に大きな影響を与えたのが、仲間を集めるためにカジノで行った「ラビット・ナポコフ」というゲームである。カンナはその能力でもって周囲の人々の注目を集めていく。さらに、先述した新宿の教会の集会では、スプーン曲げを披露している。(図四)

このスプーン曲げはカンナの父親であるフクベエも少年時代に行っている。フクベエはこの他にも超能力少年として万丈目と協力してテレビに出演しようとしたり、理科室で首を吊っても死なないという実験を行い、ヤマネらに目撃させていたりする。しかし、テレビ出演では「インチキ」だと言われてしまう。また、理科室での実験は、万丈目から手に入れた特殊なロープを使ったトリックだった



【図一】『20世紀少年』第9巻 第10話



【図二】『20世紀少年』第9巻 第10話



【図三】『20世紀少年』第1巻 第2話



た。つまり、フクベエはスプーンを曲げることはできても、それ以上の能力は持っていないということである。

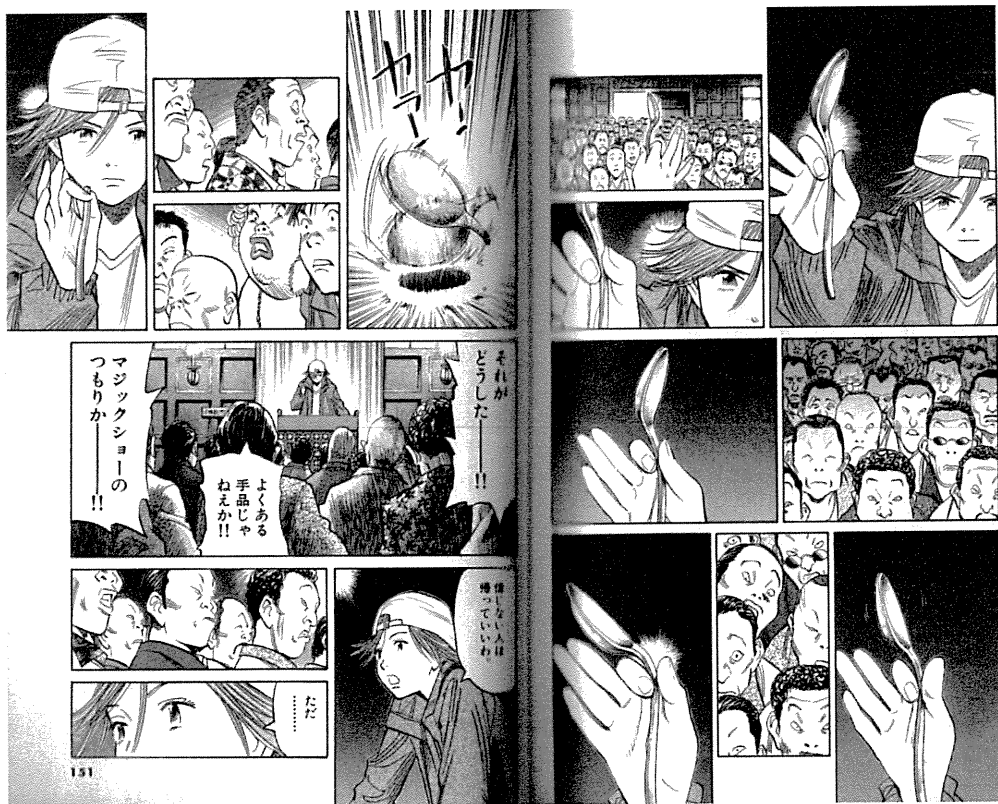
また、ケンヂたちの少年時代にあたる一九七〇年代、日本で超能力ブームが巻き起こった。特に有名な超能力者が、ユリ・ゲラーである。ユリ・ゲラーは一九七四年に来日し、「イレブンPM」というテレビ番組でスプーン曲げと透視を披露した。また、その後もカナダから日本に念力を飛ばし、テレビ視聴者が持つ止まった時計を動かすなどの超能力を見せた。これについて、安齋育郎氏は『科学と非科学の間』<sup>16)</sup>で、次のように述べている。

スプーンを曲げたり折ったりする方法には、大きく分けて二つあります。つまり、細工を施したタネありのスプーンを使うか、普通のスプーンを使うかです。ほとんど手を触れずに曲げたり折ったりするには、小細工が必要です。「イレブンPM」の時にも、「ユリ・ゲラーがNTVの工作室に閉じこもる時間帯があった」という複数のNTV職員の証言があります。(中略)したがって、スプーン曲げの「超能力」を実験する場合には、術者または術者の関係者が実験材料のスプーンを用意したのであれば、たとえ何万回テストしても信頼性を欠くので、科学的に意味のある実験をするのなら、スプーンのような特殊な形のものを用いるのではなく、信頼のおける第三者が準備した、太さが均一で、組成も均一な棒を用いてやるのが求められます。(中略)

しかし、これまでのところ、たとえば日本物理学会のような科学者の責任ある団体が、厳密な条件を保証して試みた実験はありません。

(傍線論者)

【図四】『20世紀少年』第9巻 第8話



つまり、ユリ・ゲラーの超能力はトリックである可能性を含んでおり、科学的に超能力が本物か「インチキ」かは証明されていないということである。

作中でもカンナがスプーン曲げを披露した場面で、「マジックショーのつもりか——!!」と野次を飛ばされていたり、先述したようにフクベエが「インチキ」だと言われてしまったりと、超能力は本物であるという証明が難しく、また、本物であることを証明する以前に、「インチキ」であるということが前提とされているのである。

それにも関わらず、理科室での実験のようにフクベエが自分に超能力があるかのように演出するのは、周囲の人々の注目を集め、自分が特別だということを誇示しようとしたからである。また、フクベエが「グともだち」となり、新興宗教を立ち上げた際にも、ロープで体を吊り、宙に浮いているように見せるなどして、人々の注目を集め、信仰の対象となっていた。

一方、カンナは自分の能力のことを次のように言っている。

カンナ「なんとなくできたの……小さい頃から……カードの数字当てたり……スプーン曲げたり……でも、そんなことができたからって、何になるの。何が超能力よ。こんなもの、なんにもなりやしないわ……!! ケンヂおじちゃんを助けることもできなかった……!!」

（『20世紀少年』第9巻第5話 傍線論者）

カンナも「ラビット・ナボコフ」やスプーン曲げなど、注目を集めるために超能力を使ってみせることはあるが、フクベエのようにそれを誇示しようとはしていない。「何が超能力よ。こんなもの、



なんにもなりやしないわ」と言っているように、超能力があってもできないことがあると自覚しているのである。

それを受け、「ラビット・ナボコフ」の時にカンナに協力した男性は、次のように言っている。

男性「このカード……さっきのどさくさにまぎれて、いただいておいた……あんたがラビット・ナボコフで最後に勝負しようとしたカードだ。親のカードはジョーカー。あんたがハートの2を引き当てたら、最高倍率の大勝ちだった……それまでの勝負の流れで、誰もが、あんたがハートの2を引き当てると信じ……親も、あんたがカードをひっくり返す前にとちくるって銃を抜いた……スペードの6……とんだスカだ。」(中略)

男性「みんな、完全にあんたにのまれちゃった……あんた、とんでもないものを持つてる。その超能力とかいうやつ以上のな……」

『20世紀少年』第9巻第5話 傍線論者

そして、結果的にカンナは仲間を得ることに成功する。それは、カンナの持つ超能力以上のものに惹かれたからだ、この男性は語っている。つまり、フクベエが見せかけの超能力に頼つたのに対し、カンナは超能力ではない部分で、人々に自分のことを信じさせ、人々を巻き込んでいくのである。

このように、キリコ、ユキジ、カンナには神聖性、特別性が付与されている。また、彼女たちの呼び名が皆、男性たちから呼ばれた名であることにも注目したい。彼女たちが男性たち(ホモソーシャル)の中でどのような関係性を築いているのかはこの後考察してい

くが、この物語において、キリコ、ユキジ、カンナといった女性たちは、男性では果たせない役割、つまり、戦いを「見届ける」役割、次の時代(世代)へとつなぐ役割、人々を巻き込んでいく役割を、男性たちとの関係性の中で託されていくのである。

## 二 ホモソーシャルの中の女たち

ここでは、ユキジ、キリコ、カンナが他の登場人物たち、特に男性たちとの関係の中で、どのような立場、役割にあるのか明確にしていきたい。

まず、ユキジについてだが、彼女は「9人の戦士」の中で唯一の女性、いわゆる「紅一点」の存在である。ユキジは少年時代、周りの子供たちから「史上最強の女子」と呼ばれていた。祖父から柔道を習っていたこともあり、その「強さ」は幼い頃から発揮されている。小学校では他の子供たちをいじめていたヤン坊マー坊兄弟を懲らしめたり、中学校では他校の生徒十三人(ユキジは十二人だと言っている)を病院送りにしたり、高校では暴走族の頭を裸にして(ユキジはパンツ一丁だと言っている)縛り上げたりと、数々の武勇伝を残している。これらは話に多少の尾ひれはついているものの、ほぼ事実である。これらの事実や、ユキジ自身の勝気な性格から、ユキジはいわゆる「男勝りな女性」として描かれていると言えるだろう。

一連の事件が始まった一九九七年では、ユキジは税関職員(麻薬犬のハンドラー)として、新東京国際空港(成田空港)で働いていた。空港でケンヂたちに再会した際、「ともだち」のマークを見

せられたことがきっかけで、そのマークを作ったのはオッチョであることを思い出す。そして、ケンヂに「＼ともだち」の被害者の会に来るように言ったり、「＼ともだち」の情報を得るため小学校のクラス会を企画したり、「＼ともだち」に対抗していくために、ケンヂを促していくのである。

こうして、ユキジはケンヂたちと共に「＼ともだち」に対抗していくことになるのだが、いざ「＼ともだち」と戦うとなると、ケンヂたちはユキジのことを戦線から遠ざけようとする。二〇〇〇年の「血の大みそか」前、ケンヂが「9人の戦士」を招集した時、ユキジには声をかけていなかった。また、「血の大みそか」当日も、ユキジはオッチョから「カンナを守れ」と言われる。そして、ケンヂたちが巨大ロボットに立ち向かう中、ユキジはモンちゃんと共に車の中に残ることになる。この時のモンちゃんの話について注目してみたい。

モンちゃん「知ってるか？ ユキジ。」

ユキジ「ん？」

モンちゃん「俺らみんな……おまえのことが好きだった。」

ユキジ「うそ……」

モンちゃん「本当だよ。俺だってそうだった。」

ユキジ「言ってくればよかったのに。」

モンちゃん「だっておまえは……ケンヂのことが好きだったろ。」

第一、そんなこと言ったら……二度とあそこには行けなくなるような気がした……あの秘密基地には……は……」

〔『20世紀少年』第7巻第7話 傍線論者〕

モンちゃんは、ユキジのことが好きだと言ってしまったら秘密基地には行けなくなるような気がした、と語っている。つまり、秘密基地という少年たちのコミュニティには、異性との恋愛を持ち込むことができなかったということである。この少年たちのコミュニティは、ホモソーシャルの関係を形成している。そのホモソーシャルの中にユキジが入ることができるのは、恋愛対象としてではなく、共に「悪」と戦う「仲間」だからである。そして「仲間」となれたのは、ユキジが「男勝り」で「強い」からである。

また、「9人の戦士」の招集時に声をかけられなかったことに対して、ユキジは「なんで、あたしを呼ばないわけ？ あたしが女だから？ じゃあ聞くけど、この中にあたしより強い人、何人いる？」と言っている。おそらく戦闘においてユキジよりも強い人物は、「シヨウゲン」と呼ばれていたオッチョくらいしかいないだろう。ユキジはその「強さ」によって、ホモソーシャルの中に切り込んでいくことができる女性なのである。

しかし、先述したように、「血の大みそか」の時など、いざ「＼ともだち」と戦うとなると、ケンヂたちはユキジのことを戦線から遠ざけようとしている。つまり、ホモソーシャルの中から、女性であるユキジは外されるのである。

また、モンちゃんはユキジにだけ、自分が不治の病に侵されていることを告白する。そして「血の大みそか」後、モンちゃんはユキジに自分が手に入れた「しんよげんの書」の情報を託す。モンちゃんは、ユキジがホモソーシャルから外された存在だからこそ、他のメンバーには言うことができない秘密を託すことができたのではないだろうか。ユキジは「強さ」によって、ホモソーシャルの中に切

り込むことができる存在であると同時に、ホモソーシャルから外されることで、「見届ける」者としての役割や、重要な秘密を託されていく存在なのである。

次に、キリコについて考察していきたい。先述した通り、キリコは物語の中で、「母親」としての役割を与えられている人物である。そしてそのことが、ケンヂと「ともだち」(フクベエ)の関係性においても影響を与えている。次の引用は、「ともだちコンサート」でケンヂと「ともだち」が対面した場面である。

「ともだち」 「第一、君には絶対に撃てない理由があるよ。」

ケンヂ 「……?。」

「ともだち」 「カンナは元気かい?。」

ケンヂ 「……?。」

「ともだち」 「カンナの父親を……撃つことはできないだろ?。」

ケンヂ 「な……何だって……?。」

「ともだち」 「君は、僕の義理の弟だ。」

ケンヂ 「嘘だ……嘘だ!!。」

「ともだち」 「偉大なる予言者、僕のブラザーに祝福を!!。」

(『20世紀少年』第3巻第4話 傍線論者)

ここで初めて、カンナの父親が「ともだち」であることが発覚する。つまり、「ともだち」はケンヂにとって姉の夫であり、義兄弟の関係となるのである。キリコ、そしてカンナの存在によって、「ともだち」とケンヂは小学校の同級生という関係以上の強い結びつき(ホモソーシャルの関係性)を持つことになる。

次に、この「ともだち」とキリコの娘であるカンナについて考察していきたい。カンナが物語の中で中心人物となっていくのは、

第一の「ともだち」台頭時代以降である。二〇一四年、カンナは仙台から東京へ上京し、ユキジがその身元引き受け人となる。そして、ユキジはカンナのことを「娘」と語っている。このようにカンナは、カンナの近しい人物、協力者たちにとって、「娘」として描かれていく。

カンナはローマ法王の暗殺を阻止するために、抗争を繰り返していた中国マフィアとタイマフィアを仲介し、協力を得ることに成功する。そしてそれ以降も、中国マフィアとタイマフィアはカンナに協力をしていく。第二の「ともだち」台頭時代に入った後、マフィアたちはカンナの元へ送られてきたワクチン(追悼式で「ともだち」復活の演出が行われた際、会場にいた人々に「ともだち」からワクチンが送られている)をカンナに打たせるために、一芝居打つことを決める。次の引用は、タイマフィアのボスであるチャイポンが、カンナにそのことを告げた場面である。

チャイポン 「カンナよ……ワクチンは打ったのか……?。」

カンナ 「うん、昨日みんな……。」

チャイポン 「そうか……生きろよ……奴らの分も……。」

カンナ 「奴ら……って……?。」

チャイポン 「連中の打ったのは、ニセモノだ。」(中略)

カンナ 「どういうこと……?。」

チャイポン 「奴らが打ったのはただの……ブドウ糖だ……。」(中略)

チャイポン 「ああでもしなきゃ、おまえはワクチンを打たない

……俺達マフィアは、血でつながった以上の仲間だ……俺達はその仲間を殺された……俺達は

許さない……仲間の仇は必ず討つ……」(中略)

チャイボン「生きるんだカンナ……みんながこう言ってた……

おまえは、希望の星だ……おまえは私達の……娘だ……」

〔『20世紀少年』第18巻第3話 傍線論者〕

チャイボンは「俺達マフィアは、血でつながった以上の仲間だ」と言っているが、これは中国マフィア、タイマフィア両組織に属する人々(男性たち)のことを指している。そして、当初は抗争を繰り返していた中国マフィア、タイマフィアの仲介を果たしたカンナのことを「私達の」「娘だ」と言っているのである。つまり、カンナは「娘」として、ホモソーシャルを結びつける役割を果たしているのである。

このように、キリコとカンナ母娘は、それぞれ「母親」と「娘」という役割を持ち、ホモソーシャルの中で男性たちを繋ぐ存在として描かれているのである。

### 三 母と娘の関係性

ここまで、キリコ、ユキジ、カンナに与えられた「母親」、「娘」といった役割について論じてきたが、ここで、キリコとカンナ、そしてユキジとカンナの母娘関係について考察していきたい。

まず、キリコとカンナの関係性についてだが、キリコは先述した通り、自分のことよりもカンナやケンヂのことを優先する、つまり「母親」としての役割を優先する女性として描かれている。しかし、キリコとカンナの交流は、キリコが鳴浜町の映画祭で撮られた映像

に残したカンナへのメッセージと、『21世紀少年』下巻の最終話で、アフリカで人々の治療にあたるキリコをカンナが訪ねた場面のみである。

次の引用は、鳴浜町の映画祭で撮られたキリコのメッセージである。

キリコ 「カンナ……カンナ、一生懸命……」

町の老人「残念ながら音声トラブルだ。でも俺にはなんて言つたかわかるよ。カンナ、一生懸命……幸せになれ。」

〔『20世紀少年』第11巻第10話〕

これは愛する人へのメッセージということで、町の人々にコメントをもらうという企画で撮られたものである。しかし、キリコはカンナへのメッセージの前に、「私はゴジラのような悪魔になってしまった」という言葉と、「このままでは二〇一五年で西暦が終わってしまうの」という警告のメッセージを残している。つまり、キリコはカンナへのメッセージよりも、細菌兵器に対する警告の方を優先している。

また、『21世紀少年』下巻最終話でキリコとカンナが再会する場面では、カンナがかけた「お母さん………」という言葉以外、二人の会話は描かれていない。そして次の場面では、すでにキリコは人々の治療に戻っている。(図五)

これらの場面では、キリコは、カンナとの交流よりも細菌兵器に対する警告や、治療を優先しているように捉えられる。先にも述べたが、キリコにとってカンナの「母親として、やるべきこと」は、細菌兵器のワクチンを作り、細菌兵器の開発に協力してしまつたことへの償いなのである。



【図五】『21世紀少年』下巻最終話

一方カンナは、鳴浜町の病院でキリコの残した「わたしはゴジラ  
わたしは15万人を踏みつぶした」というメモの発見以降、キリコ  
が細菌兵器を作ったと思い、カンナ自身がその罪を償うと言ってい  
る。(図六)

しかし、実際は、キリコが細菌兵器を開発したのではない。ヤマ  
ネが作った細菌のワクチンをキリコが作り、そしてヤマネがそのワ  
クチンが効かない細菌を作り、さらにキリコがワクチンを作る、と  
いったことの繰り返しにより、結果的に細菌兵器の開発に協力する  
形になってしまったのである。そして、この真実をオッチョから知  
らされたカンナは、キリコを信じて待つことを決める。つまりカン  
ナは、母親であるキリコの行動によって、自分の役割や行動を決定  
付けているのである。

こうした母親と子の関係については、『20世紀少年』だけでなく、  
前作『MONSTER』においても描かれている。浦沢直樹作品にお  
ける母親と子供の関係性は、その子供自身の役割の自覚やそれによ  
る行動の決定といった、アイデンティティの問題に結びついていく

のである。

次に、ユキジとカンナの関係性について考察していきたい。第一  
の「ごもだち」台頭時代でカンナの身元引き受け人となったユキ  
ジは、マフィアたちの抗争を止めようとしたり、「ごもだち」に  
対抗するための仲間を集めようとしたり、ローマ法王の暗殺を阻止  
しようとしたりと無茶をするカンナに対して、次のように語ってい  
る。

ユキジ 「二度とこんなムチャは許さないわよ。こんなことを言  
うとまたあなたは…ユキジおばさんは勇気がないとか、  
昔と変わってしまったとか言うでしょうけど…勇気と  
ムチャは別なの。」(中略)

ユキジ「オッチョは今も戦ってる。あたしだって戦ってる。こ  
のまま引き下がるわけじゃないでしょ。でもね…あたしに  
は守らなきゃいけないものがある。あなたは、ケンヂの  
お姉さんの娘よ。でもね…でも今は…あたしの  
娘なの。ケンヂからあずかった、大事な娘なの…」



【図六】『20世紀少年』第13巻 第4話

先述した通り、ユキジはカンナを「娘」だと言っており、つまり自分自身をカンナの母親だとしている。この「母親」としての認識について、R・D・レインは「自己と他者」の中で次のように指摘している。

女性は、子供がなくては母親にならない。彼女は、自分に母親のアイデンティティを与えるためには、子供を必要とする。

(中略) (アイデンティティ)にはすべて、他者が必要である。誰か他者との関係において、また、関係を通して、自己というアイデンティティは現実化されるのである。(中略) 補完性という言葉で私が表わそうとしているのは、それによって自己を他者が充足させたり完成させたりするような人間関係の機能のことである。(傍線論者)

また、ユキジの場合、「ケンヂからあずかった、大事な娘」とあるように、カンナを「託された」という意識が強い。第二の「ッともだち」台頭時代で、「ッともだち」勢力の本部へ乗り込んだ後にも、「あの人に顔向けができない……あなたに何かあったら……ケンヂに顔向けできない……」(図七)と語っている。そして、ここからケンヂを父親、ユキジを母親、カンナを娘とした、擬似的親子関係が形成されていることがわかる。つまり、ユキジの「母親」というアイデンティティは、レインの指摘するように、他者との関係を通して形成されているのである。

しかし、カンナはユキジのことを「ユキジおばさん」と呼んでいる。ユキジに「娘」だと言われ、共に寄り添う場面はあるが、カンナはユキジを「母親」、あるいは「母親代わり」としてではなく、

【図七】『20世紀少年』第21巻 第5話



ケンヂの仲間の女性として認識しているのではないだろうか。ここで、ユキジとカンナの間で、母娘関係の認識に「ずれ」が生じているのである。

しかし、ユキジもカンナもケンヂを信じ、期待している点では共通している。ユキジとカンナの関係性は、母と娘であると同時に、ひとりの男性を慕う二人の女性、と捉えることもできる。

このように、この物語では、カンナを中心としながら、二つの異なった母娘関係が描かれている。そして、それぞれの母娘関係の中で、他者との関係性の問題を浮かび上がらせているのである。

### 結

本論では、女性登場人物たちについて論じた。ケンヂや「ごどもだち」(フクベエとカツマタ)といった男性たちが巻き起こす戦いの中で、女性たちは特別な役割を託されている。

キリコは、「Dr.キリコ」や「ゴジラ」という呼称では「死」や「恐怖」をイメージさせる存在として、そして、「せいは」 という呼称では命を育む、命を救う存在として描かれていく。また、ユキジは、カンナと共に「最後の希望」と呼ばれ、戦いを「見届ける」役割、次の時代(世代)へと「希望」をつなぐ役割を託されていく。カンナは、さらに多くの呼称を持つ。特に「救世主」という呼称は、カンナが「ごどもだち」に対抗していくための存在(象徴)であることを示している。

また、ホモソーシャルの中では、ユキジは「強さ」によって、その中に切り込むことができる存在であり、それと同時に、ホモソー

シャルから外されることで、「見届ける」者としての役割や、重要な秘密を託されていく存在である。また、キリコとカンナは、「母親」や「娘」として、ホモソーシャルの関係を繋ぐという役割を果たしていく。

さらに、本作ではキリコとカンナ、ユキジとカンナといった、二つの異なった母娘関係が描かれている。そして、それぞれの母娘関係の中で、自己の認識と他者との関係性の問題、つまりアイデンティティの問題を浮かび上がらせている。浦沢直樹は、様々な問題を複合化させながら、繰返しアイデンティティの問題を描き続けているのである。

また、本作は、多くの登場人物による群像劇となっている。そして、本作『20世紀少年』のみならず、『MONSTER』『PLUTO』『BILLY BAT』といった作品<sup>⑧</sup>においても、多くの登場人物が存在し、それぞれの人物の立場や役割、過去のエピソード、そして、登場人物同士の関係性などが詳細に描かれている。こうした浦沢直樹作品での女性登場人物の描かれ方は、今後も注目すべき論点である。

※テキストは、全て浦沢直樹『20世紀少年』コミックス全二十二巻（小学館 二〇〇〇年三月一日～二〇〇七年一月一日）、浦沢直樹『21世紀少年』コミックス上下巻（小学館 二〇〇七年六月一日～二〇〇七年十月一日）による。

## 【註】

- (1) 浦沢直樹『20世紀少年』は、一九九九年から二〇〇六年まで『ビッグコミックスピリッツ』（小学館）にて連載された作品である。加えて、同誌にて二〇〇七年一月から七月まで、完結編である『21世紀少年』が連載された。
- (2) 実写映画は、堤幸彦監督、長崎尚志・浦沢直樹脚本で、『第1章 終わりの始まり』（二〇〇八年八月三十日公開）、『第2章 最後の希望』（二〇〇九年一月三十一日公開）、『最終章 ほくらの旗』（二〇〇九年八月二十九日公開）の三部作で製作、公開された。
- (3) 田中晴菜「浦沢直樹『20世紀少年』論——顔のない少年たち」『フェリス女学院大学 日文学院紀要 第二十二号』（フェリス女学院大学大学院 人文科学研究科日本文学専攻 二〇一五年三月三十一日）
- (4) 同前
- (5) 手塚治虫『手塚治虫文庫全集 ブラック・ジャック③』（講談社 二〇一〇年六月十一日）
- (6) 東宝映画株式会社 出版事業室編集『東宝特撮映画全史』（東宝映画株式会社 出版事業室 一九八三年十二月十日）
- (7) 講談社編集『キャラクター大全 ゴジラ 東宝特撮映画全史』（講談社 二〇一四年七月十四日）
- (8) 『新約聖書』では、イエスの死を見届けた人々は、弟子ヨハネを除いては、すべて女性たちである。「マタイによる福音書」では、「ガラリヤからイエスに従ってきた」婦人たち、「マグダラのマリア」、「ヤコブとヨセフの母マリア」、「ゼベダイの子らの母」（マタイ二七、五五―五六）、「マルコによる福音書」では、「マグダラのマリア」、「小ヤコブとヨセの母マリア」、「サロメ」、「イエスと共にエルサレムへ上って来た婦人たち」（マルコ十五、四〇―四一）、「ルカによる福音書」では、「ガラリヤから従って来た婦人たち」（ルカ二三、四九）、「ヨハネによる福音書」では、「その母（イエスの母マリア）」、「母の姉妹」、「クロパの妻マリア」、「マ



グダラのマリア」(ヨハネ十九、二五)となっている。(日本聖書協会『聖書新共同訳』一九八七年初版 二〇〇七年版)

(9) 日本基督教協議会事業部 キリスト教大事典編集委員会『キリスト教大事典』(教分館 二〇〇〇年八月一日改訂新版第十二版)

(10) 安斎育郎『科学と非科学の間』(筑摩書房 二〇〇二年八月七日)

(11) 浦沢直樹『MONSTER』では、一連の事件を引き起こしたヨハンという人物が登場する。ヨハンの母親は、ヨハンが幼い頃、旧チェコスロバキアの秘密警察の追っ手から逃れるために、ヨハンと双子の妹であるニナに全く同じ格好(女の子の格好)をさせていた。それによって、母親ですらも双子を見分けることができなかった。(浦沢直樹『MONSTER 完全版 volume.9』小学館 二〇〇八年九月三日)つまり、ヨハンとニナは母親に個々として認識されていなかったのである。このようにヨハンの母親の言動が、ヨハンのアイデンティティに影響を与えている。

(12) R・D・レイン著／志貴春彦・笠原嘉共訳『自己と他者』(みすず書房 一九七五年九月二十五日)

(13) 各作品の掲載誌、連載期間は以下の通りである。

『MONSTER』(『ビッグコミックオリジナル』小学館 一九九四年～二〇〇一年連載)／『PLUTO』(『ビッグコミックオリジナル』小学館 二〇〇三年～二〇〇九年連載)／『BILLY BAT』(『キーンング』講談社 二〇〇八年～連載中)